〈研究ノート〉

相対的剥奪論　再訪（二）*

髙　坂　健　次**

はじめに

前稿（髙坂、2009）において、*The American Soldier* において定着した「相対的剥奪」概念を４つの論点にわたって検討した。なかでも中心的論点の一つであった「相対的剥奪は個人か集団か」の結論は、「相対的剥奪」が個々人の特性ではなく集団の特性であるというにあった。本稿では、その結論を *The American Soldier* で言及されている別のエピソードに照らして確認しておくとともに、すでに言及した以外の論点について触れておきたい。

前項において、上の結論を導き出した元になっているエピソードは、「昇進率と満足（不満）」との関連についてであった。筆者が原データから再構築したグラフで示したとおり、「昇進率が高ければ高いほど、満足率が下がる（あるいは、不満率が高くなる）」という関係にあることが確認できた（髙坂、2009：図１参照）。この関係は、当該集団（間の比較）についてあてはまるということを言っているのであって、当然のことながら直接的には個々人について表現した命題ではない。ここで「直接的には」と断っているのは、むろん個々人について、たとえば「昇進したものは、不満を抱く傾向がある」といったかたちで命題化し、集団的現象はそれらの個々人の反応の「集積」もしくは「集計」の結果だ、というふうに論理を展開できないこともないからだ。しかし、そもそも「昇進率」概念は、個々人の現象を示すものではなく、やはり集団的概念とみるべきだろう。

したがって、上の命題からすれば、昇進率の高い集団においては不満を抱いている人々の割合が多いということが含意されているわけで、個々人の反応を決定論的に予測しているわけではない。このことは、スタウファーたちの示したデータを読み解くうえで好都合である。というのも、どの集団（「低学歴の憲兵隊」、「高学歴の憲兵隊」、「低学歴の航空隊」、「高学歴の航空隊」）においても、NCO（下士官）に昇進した兵士のなかにも満足しているものもいれば不満を抱いているものはいるし、PVT/PFT（上等兵／一等兵）のまま昇進していない兵士のなかにも満足しているものもいれば不満を抱いているものもいるからである（髙坂、2009：表１）。

一連の論稿の後の機会に述べるように、こうした個人的事例、とくに「逸脱的」事例についても、アドホックな（その場その場の）説明ではなく体系的な理論的説明が必要になる。そもそも厳密な理論観（＝現象は数理モデルからの演繹や導出を介して説明されなければならない、とする理論観）からするならば、冒頭に述べたような「～すればするほど、～である」式のいわゆる「the more, the more」型の説明方式は、不十分な記述以上の域を出ておらず、それだけでは説明にはなっていないと言わざるをえない。したがって、スタウファーたちによって「発見」（ただし、「相対的剥奪」概念の「発明」なくしては発見されえなかったという意味での「発見」）は、いずれは何がしかの数理モデルを介しての説明がなされなければならなかったのである。そして事実、それ

*キーワード：相対的剥奪、『アメリカ軍兵士』、準拠集団
本研究の一部は、科学研究費基盤研究（B）（課題番号：20330114）の援助を受けてなされたものである。
**関西学院大学社会学部教授

表1：I：124　表3の転載

TABLE 3

WILLINGNESS FOR SERVICE, BY MARITAL CONDITION ON ENTERING THE ARMY, EDUCATION, AND AGE

	PERCENTAGE IN CROSS SECTION WHO SAID THEY VOLUNTEERED OR SHOULD NOT HAVE BEEN DEFERRED:			
	Unmarried when entered Army		*Married when entered Army*	
	Not H.S. graduates	H.S. graduates	Not H.S. graduates	H.S. graduates
30 and over	68 (*320*)	77 (*157*)	59 (*193*)	64 (*128*)
25 to 29	72 (*323*)	89 (*289*)	60 (*124*)	70 (*146*)
20 to 24	73 (*572*)	85 (*719*)	67 (*144*)	76 (*105*)
Under 20	79 (*200*)	90 (*217*)	—	—

Number of cases is shown in parentheses. For source of data see Table 2.

は後日実現されていった（たとえば、Boudon, 1982；Kosaka, 1986）とはいえ、まだ十分とは言えない。

しかし、その話に入るまえに、今一度スタウファーたちの「発見」について慎重に見ておきたい。*The American Soldier* といえば、昇進率と満足（不満）の関係ばかりが多く引き合いに出されるけれども、すでに前稿で触れたように研究プロジェクトの総体は、医学部門等や純粋方法論も含む多岐に亘るものであるし（原書以外に、Madge, 1962なども参照）、「相対的剥奪」概念に関わるエピソードだけに限ってみても、昇進率問題以外の多岐に亘る。以下においては、昇進率問題以外のエピソードにも着目しておくことで、今一度それが集団の特性であることを確認しておきたい。マートン[1)]は「相対的剥奪」概念を必要とした *The American Soldier* に登場するエピソードを参照するうえで枚挙的であるので（Merton, 1959：228–229、邦訳 Pp. 210–211）、以下においては、それをも参照しつつ若干のエピソードについて確認していこう。ただし、本稿ではマートンが簡略化して示した命題の「リスト」を単純に反復するのではなく、もとのデータに立ち返って命題の意味と更なる論点について吟味していきたい。

1　「相対的剥奪」に関わるその他のエピソード

1.1　召集された既婚兵士のはなし

召集された既婚の兵士についていえば、「かれは自分と軍隊内の未婚の同僚とを比べて、同僚より自分の方が召集でより大きな犠牲を求められていると思い、またまだ召集されていない既婚の友人と自分を比べて、自分が犠牲を求められているのに、友人は全く逃れていると思う。」（I：125；Merton, 1957：228）

この命題表現によれば、「かれ」が主人公である。ここだけを読むならば、「かれ」すなわち「召集された既婚の兵士」はすべて上に引用されているように受け止めている、と主張しているように思われる。すなわち、「かれ」に例外の余地はないかのように。まずは、この命題の出所となったデータを見ておこう。

このデータを「昇進率と満足率（不満率）」の関係について眺めたときと同じように、グラフに落とし込んでみよう。いくつかのことが視覚的により明らかになる。すなわち、順不同で言えば、（1）他の条件（＝教育程度、未婚／既婚の違い）が同じであれば、年齢が高いほど、消極的に従軍しようという兵士の割合が増える。（2）他の条

1）マートンの「相対的剥奪」や「準拠集団」を扱った一章（＝第8章「準拠集団行動の理論」『社会理論と社会構造』）は、もともとは Alice S. Rossi（旧：Alice S. Kitt）との協働によって執筆されたものであるが、ここでは煩瑣なのでマートン単独の名前で話を進めている。なお、Davis, J.（1959）は、Merton and Kitt（1950）を典拠として同じ事例をとりあげて検討しているが、その事例を MK1、MK2、……と標記している。

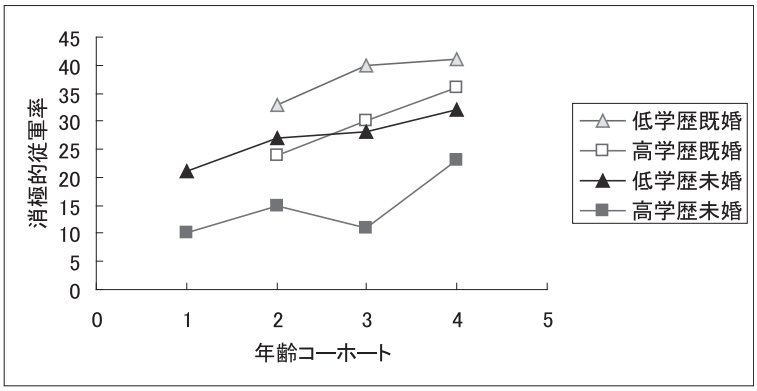

図１：従軍に対する自発性（既婚／未婚、教育、年齢別）
（年齢コーホートは、１が20歳未満、２が20～24歳、３が25～29歳、４が30以上）

件（＝教育程度、年齢の違い）が同じであれば、入隊したときに、未だ結婚していない兵士のほうが、既に結婚している兵士に比べて、自発的に従軍しようという兵士の割合が高い。（３）他の条件（＝年齢、未婚／既婚の違い）が同じであれば、教育程度の高い兵士のほうが、教育程度の低い兵士に比べて、自発的に従軍しようという兵士の割合が高い。

すなわち、これらの「発見」は、すべて割合の問題に関わるのであり、個々人の反応を特定しているわけではない。言い換えれば、こうした現象は集団的現象だということを意味しているのである。マートンが引用した箇所だけを読むと、あたかも「かれ」、すなわち個人的現象であって例外を容認しないかに読み取れる。では、スタウファーたちはどのように述べていたのだろうか。

マートンが引用した箇所に続けて、スタウファーたちは、次のように述べている。

> したがって、既婚者は、平均して（on the average）、そうでない人々［＝未婚の兵士たち］よりもしぶしぶと（with reluctance）、おそらくは不正義だという気持ち（a sense of injustice）を抱いて入隊してくる傾向がある。（I：125）

すなわち、スタウファーたちは既婚者の反応について要約する際に、「平均して」という言葉を添えるのを忘れなかったのである。既婚者について「かれ」と表現するのと、「平均して」と表現するのとでは、厳密に言えば含意が異なる。前者は、個々の既婚者を指すことで既婚者全員がそうであるかのように感じさせるのに対して、後者は「平均して」なので既婚者を一つのグループ（まとまり）としてその傾向性を述べていることが理解できる。つまり後者のばあいは、個々の兵士をとりあげればそのなかに異なる反応をする兵士を含んでいることを予想させる。このあとの記述において、スタウファーらはくどいほど「平均して」という言葉を添えることを厭わなかった。このことは銘記しておきたい。

じつは、このエピソードは、*The American Soldier* のなかでははじめて「相対的剥奪」概念がさまざまな一見矛盾して映りかねない現象を解釈し説明するうえで役に立つ概念として導入されたエピソードである。その意味では記念碑的エピソードだったと言ってもいいかもしれない。この節（I：第４章、第３節）の一部は、後日、調査方法論の論文集のなかにほぼ原文のまま「Willingness for Military Service」と題する短くはあるが独立の章として採録されている（Stouffer, 1972）。いかに「相対的剥奪」概念発祥の要諦となったエピソードであったかが窺い知れる。

マートンは、この「召集された既婚兵士」のエピソードを紹介した箇所の直後、スタウファーらは、上の表を参照しつつ、「年齢」のことをとりあげている。マートンが「年齢」のエピソードを外した理由は知る由もないけれども、折角の機会なので言及しておきたい。

まず、スタウファーたちの記述に耳を傾けておこう。

> より若い人々—既婚か未婚かということは別にして—と比べて、年齢がより上の人々は相対的により大きな剥奪を感ずるだけの少なくとも３つの根拠をもっていた。まず、自分の仕事をこなさなければならなかった。いわば、高校出たばかりの若造よりは犠牲にしなければならないことが多い。……第二に、年寄りは確率的にみて（in all probability、多分）若い者よりも平均して（on the average）多くの身体的障がいをもっていた。これらの障がいは、入隊審査委員会や徴兵局を納得させるほど深刻なものでなくとも、兵士が徴兵されたことに対しては不公平感を弁護する根拠として十分な言い分（a good rationalization）になりえた。仕事と健康、これら二つの要因はどちらも、これらを理由に徴兵猶予になった兵士が、若い兵士よりも年齢がより上の兵士のほうに多くみられた点でなおさら始末に悪い。つまり年齢がより上の兵士に対して既婚兵などに対すると同様に、年配や既婚者が実際には少ない剥奪しか経験していない連中だという紋切り型の事例（ready-made examples of men）を提供することになったからである。第三に、平均して、年齢がより上のもの—とくに30歳以上の—は、若いものに比べて扶養家族や、父母という準扶養家族を多く抱える傾向があり、この事実にもかかわらず徴兵されたとなるとそれだけ不公平感の根拠が多くなった。（I：126）

相対的剥奪概念からすれば、年長者には自らに対して不遇感をもたらし、年少者には「年長者が優遇されている」と思わせる点で、「年齢」要因は二重に作用していると言えようか。

1.2　ハイスクールを出ていない者で召集を受けた兵士のはなし

「通常、ハイスクールの卒業者や大学生は召集するのにうってつけの候補者である。職業上の理由で召集されるかされないかのすれすれの事例は、それ程教育程度の高くないグループの方にずっと多い。概していえば、ハイスクールを出ていない者で召集を受けた連中は、自分と比べて何ら召集延期を受ける権利がないと思われる知人が多数いるのではないかと文句をいうし、……まだ民間にいる自分の友人と比べて自分らは犠牲を求められているのに、奴らはそれを勘弁してもらっていると思いがちである。」（I：127；Merton, 1957：228　訳は邦訳のママ）

この命題も部分的には表１、つまりは図１から導かれたものである。中身に立ち入る前に、少し細かいことになるが、マートンの本の邦訳を問題にしておきたい。邦訳の問題であるから、ここに関するかぎり、むろんマートン自身に責任があるわけではない。

この命題の冒頭にある「通常」と訳されている箇所の一文は、原文では、「The average high school graduate or college man was a clear-cut candidate for induction.」である。つまり、字義通りに訳せば、「平均的なハイスクール卒業生や大学生は、明確な徴兵候補者であった」となるだろうか。ここでの「平均的な」という表現のニュアンスは、スタウファーたちも説明していない以上私には分からないが、たとえば「健康に特段の問題がないかぎり」と読むことができるだろう。たとえ、「平均的な」の内容が特定できないとしても、それが主体（＝高校卒業生や大学生）の特性にかかわることであることは疑義を挟む余地はないであろう。すなわち、主体側には当然偏差があることを前提としている。それに対して、「通常」はどうか。それは、文章全体にかかる副詞的役割を果たすので、主体側の特性にかかわることもあるかもしれないが、客体側（たとえば、徴兵委員会）の判断や選抜のルールや仕方にかかわることを容認することになりはしないか。むろん、揚げ足をとるつもりはない。しかし、訳語の違いによって、指示対象に違いが生ずるということを指摘しているのであり、スタウファーたちの原文では、あくまで主体側の問題を指していたと思われるのに、「通常」ではその限定が利かない。

邦訳の問題はもう一箇所ある。上の命題中の「概していえば」である。これも原文は「平均し

て（On the average）」である。「概していえば」で文意が通らないとか、間違っていると言おうとしているのではない。繰り返せば、スタウファーたちにとって、この命題化の元となったデータは表１やそれに関連する情報であって、それ以外ではない。したがって、「ハイスクールを出ていない者」のなかにも上の命題のように「文句をいったり」「犠牲を求められていると感じたり」する者もいれば、そうではない者もいる。ただ、「平均すれば」前者のタイプが（「ハイスクールを出た者」に比べて）多い、ということを意味しているのである。ここでは、「平均すれば」は単に前者のタイプの者が全体に占める割合が多いとか少ないという割合を指している。文字通りの平均であれ、割合であれ、いずれにせよ、統計量を指しているわけである。それに対して、「概していえば」では統計量であることの含意は伝わらないとは言わないまでも、伝わりにくい。スタウファーたちは、当時の社会調査方法論の専門家たちであり、「相対的剥奪」概念の発明と理論的価値を強調した点では人後に落ちないとしても、それはデータの上では統計量を通して確認できることだと認識していたと思われる。（統計量として確認できる現象を、どのように説明すべきかについては、のちほど詳論しなくてはならないが、ここでは触れない。）邦訳者たちは、この命題がそうした性質をもっていることの認識を欠いていたか、十分な認識をもって翻訳作業には臨んでいなかったのではないかと思われる。

スタウファーたちがくどいほど（と一般の人々には思われかねないほど）「平均して」の言葉を挿入しつつ議論を展開していたことは、素朴な事柄ではあるが、強調しておきたい。上の命題に至る直前のところの議論において、「相対的剥奪」概念が年齢の違いや既婚／未婚の違いに関連するほどには、教育程度の違いには関連しないのではないかと思われるかもしれないが、実際のデータからすれば、同じように関連していると述べている。それに続いて：

> 健康をとってみよう。教育の高いものは、平均して［原文はイタリックスによる強調］、教育の低いものよりは健康だったと推測しても無理はないだろう。教育と所得とはじつに高い相関関係にある。そして、相対的に高い所得家庭出身の人々の子どもは栄養状態もよく、医療や歯科治療の状態もよく、性病にかかっていることは少ないし、非衛生から生ずる危険に対する予防もできている。したがって、そのような人々は、平均して、徴兵のさいに不公平があったと感ずるだけの身体的根拠をもっていない傾向がある。そして4-F[2]に分類された友人の数も、平均して、少ない。（I：126-127、ただし下線は引用者による）

この記述のあとに「あるいは、仕事をとってみよう。教育の低い兵士たちが教育の高い兵士たちにくらべてこの点でより大きな犠牲をはらったということはないだろう。しかし……」という文章があり、そのあとに、マートンが引用した上の命題の後段（前段ではない）の「……まだ民間にいる友人と比べて……」の文章が続く。後段の文章のあとでは、スタウファーらは、次のように述べている。

> 職業的根拠から兵役免除にされた多くの場合の二大職種は、農業と熟練労働であった。それらの仕事は、主にハイスクールを修了しなかった連中が就いていた。専門職業従事者、販売従事者、およびホワイトカラーの大半は、或る種の経営的職業や技術者分野では例外があったものの、徴兵猶予にはならなかった。（I：127）

このあとに、マートンが引用した上の命題の前段の文章が続く。前段の文章のあと、原文ではそのパラグラフの終わりに向かって、次の文章が書かれている。

> 調査部局のデータが示しているように、ハイスクールを卒業していない兵士は教育の高い

2）4-F とは、米国の選択義務兵役法に基づく指定で、身体的、精神的または道徳的に不適格であることを理由にした兵役免除区分のことである（『ランダムハウス英和大辞典』第２版、1994年、小学館、p. 1048）

兵士に比べて、自分は実際に徴兵延期をしてもらおうとしたけれども却下されてしまったと報告する傾向があった。最後に、教育の高い者（年齢条件や既婚／未婚条件を一定にすれば）は、平均して、扶養する父母について心配がいくぶん少なかった。彼らの両親は平均して相対的により安定した所得集団に属していたからである。(I：127、下線は引用者)

当節（第３節）だけでもまだ終わらないので、ここで一旦擱く。マートンが「相対的剥奪」に関わるエピソードとして列挙している第二番目の命題をめぐっていくつか判明したことをあらためて指摘しておきたい。一つは、マートンは *The American Soldier* から正確に引用はしているものの、引用は原文で前段を占めていた箇所を後段にまわし、原文で後段を占めていた箇所を前段にまわすなど、狙いはともかくとして、叙述に「編集」が加わっていること。第二に、マートンが引用しなかった文章を掘り起こしてみると、その文章のなかには、「平均して」という表現が繰り返し述べられており、ときにはその表現がイタリックスになっていて強調されていたこと。言い換えれば、「平均して」のそうした頻出や強調が、マートンの引用からは消えてしまったこと。第三に、邦訳の問題であるが、「平均的」や「平均して」の表現が、統計量を強くは感じさせない日本語に訳されてしまっていたこと、である。スタウファーらは「平均して」を強調ないし強く自覚していたと思われるが、以上の結果、原文にまで遡らないでマートンを読んだり、その邦訳を読んだにとどまっていると、スタウファーらの強調や自覚が伝わらないか、すくなくとも強くは伝わらなかったように思われる。言うまでもなく、「平均して」という言い方は「～の傾向がある（be likely　to～）」（この表現も頻出している）と同様、発見された命題が個人の特性ではなく集団の特性を指すことを示唆している。

ここで別のエピソードを２つばかり見てみよう。

1.3　海外にある兵士のはなし

「……相対的不満ならびに相対的褒賞の概念は……この問題に関連した或る心理的過程を理解する手助けとなる。一般的にいうと、勿論、海外にある兵士はまだ母国にいる兵士と比べて家庭とのつながりを断たれる度合いも大きく、またこれまで慣れ親しんだ合衆国での多くの生活の楽しみからも切断されている。しかし戦闘している兵士に比べると、海外にいる兵士で（現に戦闘舞台となっている地域より後方にあって）戦闘に参加せず、また今暫く戦闘に加わらないですむ者は、現に戦闘している者よりはるかに不満の少ないことも事実である。」(I：172、邦訳のママ)

1.4　南部にいるニグロの兵士のはなし

「簡単にいえばこうなる。南部にいるニグロの兵士は自分を民間にいる南部のニグロと比べるから、彼らにとって軍隊生活のもつ心理的価値は、自分を民間にいる北部のニグロと比べる北部のニグロ兵士の場合よりもはるかに大きい。(I：564、邦訳のママ)

２　もう一つの論点：誰と比較するのか

前稿における「論点４」は、期待水準はどのように形成されるか？であった。しかしこれについては明確な解答は出しえなかった。それは、スタウファーたちがその議論に対して明確な議論をしていなかったためである。しかし、上の３つのエピソードを読んでみると「(自分の境遇と）誰（の境遇）と比較するのか」という疑問が湧いてくる。おそらくは、誰と比較するかによって期待水準も異なってくるのであろう。昇進率と満足率との関連で言えば、昇進率の高い高学歴航空隊に所属してそのなかのメンバー同士で比較しあうと仮定すれば、おのずから期待水準は高くなるであろうから。しかし、そのメンバーが仮にもっと昇進率の低い低学歴憲兵隊員と比較したばあい（とても現実には考えにくいが)、期待水準は低くなるかもしれない。

このようにみてくると、論点４と「もう一つの論点」とは密接な関係があると思える。もしかすれば、一つのコインの裏表の関係にあるのかもしれない。その当否はしばらく措くとして、ここでは「誰と比較するのか」の観点から眺めてみよ

う。じつは、マートンの当該章は「準拠集団行動の理論」に関する章であって、「相対的剥奪」論が比較の基準を提供する集団としての「準拠集団」論と密接な関連にあることを論じているのである。

したがって、上の最後の２つの事例で「比較」についての言及が顕著である。「海外にいる兵士（で戦闘に加わっていない兵士）」は、「まだ母国にいる兵士」と比べると剥奪感を募らせるけれども「戦闘に加わっている兵士」と比べると不満は少ないという。「南部にいるニグロの兵士」は自分を民間にいる南部のニグロと比べることで、軍隊生活のもつ心理的価値が大きくなるという。また、自分を民間にいる北部のニグロと比べる「北部のニグロ兵士」の場合よりもはるかに大きいという。では、なぜそうなるのか。上に引用した命題風の事例だけでは分かりにくい。スタウファーたちの説明は、（たとえば南部にいるニグロの兵士の例でいえば）次のようなものであった。ほんの少し長い話になるが背景的な事情も含めて要点をかいつまんで述べておこう。そもそも「ニグロ兵」（あえて、Negro Soldier をこのように訳しておく）問題は、現代（少なくとも当時の）アメリカ社会の縮図であり、軍隊のなかには「人種的な支配と服従、イデオロギーとカウンター・イデオロギー、不信、緊張、摩擦がみられた」（Stouffer, I：486）。*The American Soldier* の第Ⅰ巻第10章として設けられた「ニグロ兵士」は100ページ以上にも及ぶ（他章にくらべても異常に）長い章で、その問題の根深さと深刻さとを窺わせる。上に命題化された箇所は、その章のなかに収められた第Ⅵ節「北部に駐屯されることと南部に駐屯されることに対する反応の比較」（Pp. 550–566）に盛り込まれている。

兵士をどこで訓練するかは、軍事目的に適した土地、地元の都市中心部のロケーション、交通事情、地元諸集団や選挙で選ばれた代表等々の要求などを勘案したうえで決まってくる。結果的にみれば、（当時の）訓練センターはアメリカ南部に集中することになったのである。全土で徴兵された白人兵のざっと47％と、ニグロ兵のざっと55％が「南部」に訓練兵として配属された（「南部」の定義については、原文注37を参照）。このことは、北部出身のニグロ兵にとっては自分が慣れ親しんできた環境が変わって、それまでとは異なった人種関係と接することを意味したのである。

1943年３月、ニグロ部隊を対象とした大掛かりな調査が行われた。たとえば、兵営地については、どこの兵営地を望むかに関連する（３つの）質問がなされた。大雑把な結果だけを見るならば、北部出身のニグロ兵は（その時点で駐屯している地域の南北のいかんにかかわらず）北部の兵営地をのぞみ、南部出身のニグロ兵で北部に駐屯している兵士は南北相半ばして望み、南部に駐屯している兵士は圧倒的に南部での駐屯を望んでいた。（ちなみに、白人兵にも同様の傾向が見られた）。ニグロ兵が北部を望む主な理由は「分隊による人種的取り扱いの違い」であり、南部を望む主な理由は「家族がそこに居るから」であった。

ニグロ兵のなかにも教育レベルの違い（小学校、ハイスクール、ハイスクール卒）はあった。さきほど、北部での駐屯を望むニグロ兵のことを述べたが、北部出身のニグロ兵で北部の兵営を望む割合は教育程度によって差は見られなかったが、南部出身のニグロ兵で北部の兵営を望む割合は、教育程度によって著しい差が見られた。すなわち、高学歴ほど北部行きを望んだのである。なぜ、そんなことが起きたのか。

調査はさらに、地域の警察機関（民間と軍）と地域の交通機関に対する受け止め方の違いを尋ねている。まず、「町の警察」が（ニグロ兵に対する扱いが）公平だと思うかどうか、である。ニグロ兵は、出身の南北にかかわらず、また駐屯の南北にかかわらず、白人兵にくらべて「公平」と答えた割合が小さい。多くは「通常は公平ではない」を選んだのである。少しだけ詳しく見ると、北部出身のニグロ兵は、北部に駐屯している兵士と南部に駐屯している兵士とで、「通常は公平ではない」を選んだ割合に相当差がある。つまり、南部に駐屯している兵士でそう答えた割合が多い。しかし、南部出身のニグロ兵のばあいは、駐屯地の南北差でそれほどの違いは見られなかった。似たような反応は、軍警察つまり憲兵隊についても言えて、北部出身のニグロ兵、とくに南部に駐屯しているニグロ兵はとくに白人の憲兵隊に対して批判的であった。

兵士が兵営地への行き帰りに利用する地域のバスサービスに対する意見はどうか。兵士には兵営地とダウンタウンをつなぐバスの乗車パスが与えられていたが、彼らにとって（白人兵とニグロ兵とを問わず）バスの来るのが遅かったり不規則であったり、混み過ぎていたりで、とかくイライラの種であった。それだけではない。南部に駐屯していたニグロ兵にとっては、「差別乗車」が行き渡っていたために、不平不満はもっと強かった。「ニグロは後部座席に」という規制があったことで、白人で混んでいるときにはしばしば置いてきぼり、事実上の乗車拒否に遭ったからである。南部の民間のバス運転手は自分なりに過度なまさつを引き起こさぬよう工夫はしていたものの、「差別乗車」は目に見える南部の人種差別習俗のシンボルであった。当然の結果として、兵士の意見にはこのような状況が反映していた。白人兵はさほど不平不満は漏らしていなかったが、ニグロ兵の不平不満は大であった。北部出身のニグロ兵のなかでは、北部に駐屯していた兵士よりは南部に駐屯していた兵士の方が不平不満は大きかった。他方、南部出身のニグロ兵は（白人兵より不平不満の割合は高かったものの）北部出身のニグロ兵ほど不平不満の割合は高くなかった。

以上は、兵士への質問調査の結果から読み取れることであった。結果からすれば、南部にいるニグロ兵は相当大きな不遇を経験していると言って差し支えない。しかし、不遇がそのまま心理的価値（＝心理的満足）の欠如につながるか、と言うとそうではない。むしろ結論を先取りして言えば、南部にいるニグロ兵は相対比較的には満足しているのである。ここに「比較」の問題が介在する。以下の文章は、マートンが第８の事例として述べているものだ。

> ニグロの兵士は、彼が南部の都市で見かける大多数のニグロの民間人と比べて、割りに生活のゆとりがあり、また威厳のある地位にいたのである。（I：563；Merton，1957：、邦訳のママ）

続いて（マートンは引いてはいないが）スタウファーらは次のように続けている。

> 彼の所得は、少なくとも南部の一般的標準からすれば高かった。さらに、民間に見受けられた差別慣行を軍隊がひきずっていたにもかかわらず、ニグロ兵は、ニグロの民間人が白人の民間人から受けていた扱いに比べると白人兵からははるかに平等的な扱いを受けていた。公式には、軍の政策はつねに人種待遇の平等を主張してきた。この政策が実際には分離策を意味し、繰り返される戦争を通して（白人の指揮官のなかには心の奥底では密かに望んでいたことに反して）これらの政策を戦争局が実行し強制力を発揮しようとする努力が失敗に終わったことがしばしばだったとしても、軍政策の公式の主張としてはそうだったのである。
>
> 他方、北部に駐屯している北部出身のニグロ兵を考えてみよ。兵士と民間人との間の所得格差や地位格差は南部と同じではなかった。つまり、北部にいるニグロの民間の知人の稼ぎ出す力はかつてないほどに高く、ニグロ兵の所得をはるかに上回ることもざらであった。さらに、軍隊内の人種差別と北部民間社会での人種差別の違いは、しばしば南部とは逆であった[＝軍隊内のほうがひどかった]。北部のニグロは北部の市民生活における無数の差別行為やイライラには慣れっこになっていたけれども、彼は軍隊に存在したほどには人種差別的な公式政策には遭遇せずに済んだ。（I：563-564）

先の2.4に紹介した命題は、じつはこの文章のあとに続くものだったのである。命題の冒頭「簡単にいえばこう［＝以下のように］なる」との先行説明はざっと以上のようなものである。部分的にはすでに紹介したが、希望する兵営地や、警察やバスサービスに対する評価については詳細な調査結果が図表のかたちで紹介され、詳論されている。重要な論点としては、同じ境遇が誰の境遇と比較するかによって評価が左右されるという点にある。スタウファーらはそれを「相対的地位（relative status）」によって決まるのだという風に表現をし（I：563）、マートンはそこから比較機能を果す準拠集団概念に議論を発展させたのである。

3 まとめ

私たちが自分の境遇を評価するさいに、誰（の境遇）と比較するかによって、評価が高くも低くもなるということは日常的にも経験していることである。しかし誰と比較するか、言い換えればどの集団を準拠集団として選ぶのかについては自明ではない。トートロジーに陥ることなく、また「後付け」的詭弁に終始することなく、理論的に誰と比べるかを追究するには、夥しい数の文献と研究をまずは参照する必要がある。（手近なところで参考にすれば、たとえばGoogle scholarで検索をかけると、「準拠集団」に関する文献は2,900件、「reference group」に関する文献は5,180,000件ある。因みに、「相対的剥奪」は1,190件、「relative deprivation」では285,000件あげられている。）しかしながら、ここでは初心に立ち返って「相対的剥奪」概念の含意について、本稿のまとめをしておきたい。

本稿の前半では、スタウファーらによっては「相対的剥奪」概念が集団の特性を示すものとしてとらえられていることを確認した。とくに、彼らが「平均して」という言葉を添えることで、個々人にはバリエーションがありうることを示唆していたことを、原文を参照するなかで確認した。さらに、後半では、「誰と比較するか」という比較の機能をもつ準拠集団の問題が「相対的剥奪」概念と密接な関係にあることを、主として*The American Soldier*のなかの「ニグロの兵士」に関するエピソードを通して確認した。では、「平均して」ということと「準拠集団」の考え方とは、どこでどのように結びついているのであろうか。

「平均」という統計量（算術平均、中央値、最頻値のいかんを問わず）を得るためには、まず元となる集団（母集団であれ、標本集団であれ）が確定されなくてはならない。「相対的剥奪」現象は、その集団について適用される現象なのである。だから、「相対的剥奪」は集団の特性であって、個人の特性ではない、ということに結びつく。少なくとも、スタウファーたちが発見ないし発明した理論的概念ではそうだったのである。

では、集団の成員は、その集団を集団として自覚しているかとなると、これはその限りではないと思われる。たとえば、昇進率と満足率（不満率）の関係ですでに見たように、低学歴憲兵隊、高学歴憲兵隊、低学歴航空隊、高学歴航空隊、という4つの集団を眺めたばあい、これらの個々の集団の成員がそれぞれの集団にアイデンティティをいだくことによって集団と認知していたかとなると何とも言えない。このことは大きく憲兵隊と航空隊という風に2つの集団に括って考えてみても同様である。集団としてのアイデンティティをもっているかどうかについては、別途確かめる手立てはあろう。しかし考えてみれば、集団として認知されているかどうかが、「相対的剥奪」概念の要点ではないと思う。このことは、本稿の表1や図1をみても分かる。年代別で従軍自発性が異なったとしても、特定の年代の成員がそのことを自覚しているわけではかならずしもないであろうし、そのこと自体を「相対的剥奪」は問題にしたのではない。年代別に「平均して」みれば、自発性において有意差があったということが問題なのである。あるいは、既婚者と未婚者とで有意差があったということが問題なのである。さらに言えば、客観的にみれば恵まれていると思われる集団が「平均して」みれば、相対的に剥奪されている（と感じている）ことが興味深い点なのである。昇進率がどこまで正確に内外の成員から認知されているかは分からない。

他方、「比較する」という行為は大なり小なり自覚的行為である。ここでは直接には自分が自分の境遇と他者（の境遇）と比較するのである。この比較がどこまで純粋に個人と個人の比較なのか、それぞれの集団を背負った典型例としての自分と他者なのかの見分けは容易ではない。南部のニグロ兵は、南部のニグロ民間と比べる。これが純粋に個人と個人の比較なのか、それぞれの集団を背負ったうえでの自他比較なのかは分かりにくい。しかし、そのこと自体は問題ではなく、「相対的剥奪」論からみれば、それぞれを集団としてみたうえで、さらに「平均して」みて、経験的発見をうまく説明できるかが問題である。誰と比較するかが仮説的にであっても確定できるということは、じつはその「誰か」が所属する集団（目に

見えないこともあろう）と比較対照されるべき存在としての自己の集団が確定されていることになる。そのときの自己の集団について「平均」がなされるのである。

要するに、「相対的剥奪」概念が成り立つためには、全体性（＝ミクロコスモス）としての集団が確定されなければならず、その集団の比較対照としての「誰か」が確定されなければならないのである。それらの自他の集団が成員の自覚に支えられた集団であるかどうか、仮説的に抽出された集団であるかどうか、はすぐには問う必要のないことなのである。そして自他の集団が確定された段階で、境遇についてであれ、成員の態度や評価や満足／不満についてであれ「平均して」とらえることで、「相対的剥奪」論は、一見矛盾して見える現象を一貫して説明しようとするのである。では、どのような手続きが「科学的説明」には必要か。スタウファーらの *The American Soldier* は、まだ経験的調査にもとづく関連現象の発見とそれを説明するための理論的概念の発明とに成功した段階であって、今しがた述べた「科学的説明」の段階までには至らなかったと考える。むろん、「コロンブスの卵」と同様、科学的説明に向けての小さくはない針穴をこじあけた点で、スタウファーらの業績は銘記されるべきであることは言うまでもない。

参考文献

Davis, James A., 1959. 'A Formal Interpretation of the Theory of Relative Deprivation,' *Sociometry,* Vol. 22, No. 4 (Dec., 1959): 280–296.

Kosaka, K., 1986. 'A Model of Relative Deprivation' *Journal of Mathematical Sociology,* 12(1): 35–48.

髙坂健次、2009.「相対的剥奪論　再訪（一）—『アメリカ軍兵士』—、関西学院大学社会学部研究会『関西学院大学　社会学部紀要』第108号：121–132.

Madge, John., 1962. *The Origins of Scientific Sociology.* NY: The Free Press.

Merton, Robert K., 1957. *Social Theory and Social Structure,* Revised and Enlarged Edition. NY: The Free Press. マートン、(森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳)、1961.『社会理論と社会構造』東京：みすず書房.

Merton, Robert K. and Alice S. Kitt, 1950. 'Contributions to the Theory of Reference Group Behavior,' in R. K. Merton and P. F. Lazarsfeld, *Continuities in Social Research, Studies in the Scope and Method of "The American Soldier".'* Glencoe, Ill.: The Free Press. Pp. 40–105.

Stouffer Samuel A., Edward A. Suchman, Leland C. Devinney, Shirley A. Star, and Robin M. Williams, Jr., 1949. *The American Soldier. Volume I.: Adjustment During Army Life.* Princeton University Press.

Stouffer, Samuel. 1972. 'Willingness for Military Service.' In Lazarsfeld, Paul F., Ann K. Pasanella, and Morris Rosenberg (eds.), *Continuities in the Language of Social Research.* New York: The Free Press. Pp. 185–189.

A Theory of Relative Deprivation Revisited (2)

ABSTRACT

The present paper is the continuation of the earlier article by the same writer under the same topic. The present paper first introduces a couple of additional episodes related to the concept of relative deprivation from *The American Soldier* by Stouffer and others, which shows that the concept addresses the group situation instead of the individual actors perception. Second, the present paper quotes the episode on Negro soldiers in Southern areas which was not discussed fully in Merton's *Social Theory and Social Structure*, showing how the notion of relative deprivation and the conception of reference group are closely intertwined. The paper concludes that 'a group', whose member compares themselves with other members of other 'groups,' is to be identified for the purpose of clarifying theoretically the notion of relative deprivation, whether or not the member is conscious of being a member of a particular group.

Key Words: relative deprivation, *The American Soldier*, reference group